



さらしなほの里



友の会だより

第20号

2009・春



馬引きをした後、甘酒を飲みながら歓談。藁馬の右に双体道祖神

藁の名馬が勢ぞろい

土の中から現れた双体道祖神

羽尾四区和合第二の通称向村に、十六軒でお守りしている道祖神があります。昔から地域の住民の熱い信仰の守り神です。

今から三十六年ほど前に、現在の場所に移転したとき、土中より双体の道祖神が出土し、一同びっくりして今までの石碑と並べて町道に面して建立しました。しかし、その年に地区で火災や若い家長が事故で亡くなったり、不幸が続いたために道祖神の祟りではないかということで、石碑と道祖神を前と同じ西向きにして建立しなおして、明徳寺の住職に手厚くお祓いをしていただきました。以来、地域には大事な不幸も起こらず、平穏無事で過ごせるようになりました。それを機に道祖神をますます大事にしお祀りしております。

講では毎年一回の小旅行を行い、全戸参加で信仰を深め、また比較的若い衆は青年部をつくり、毎年タラの芽会、お月見、しめ縄作り、藁馬作りをして、後酒酌みかわしながらコミュニケーションをはかっています。暮れに作るしめ縄は、プロ顔負けの出来栄えと自画自賛しています。また、毎年二月八日を初牛の日と決め、各自作った藁馬をひき（うまひき）、ポタモチを供え、全戸でお参りしています。当日はうわさを聞いて遠方よりの参拝者もあります。今年は十頭の名馬が勢ぞろいしました。

朝な夕なに通る子どもたちや地域住民の平穏無事を静かに見守ってくださる山郷の道祖神を、みんな大事にお守りしています。（羽尾四区・塚田克巳）

♪ 縄文村に子どもたちの歌声が響く



昨年秋の第16回縄文まつりで、フィナーレを飾る音楽に初めて歌が奏でられました。タイトルは「祈り…縄文のムラに」。更級小学校全児童が縄文太鼓のリズムを囲んでみんなで歌いました。マイクを手にして大声で歌う子、手拍子を取る子…。歌い終わるのに名残惜しさも感じさせました。詞を作ったさらしなの里歴史資料館館長の福島修さんに、込めた思いを寄せてもらいました。

祈り…縄文のムラに

作詞・福島修

星の光に 今日^の無事を告げ
夕焼けに 子供らの幸せを祈る

里のふもとには 大河の流れ
神の山に抱かれた 私たちのムラ

豊かな日々の糧^{かて}を 今年も下さった
神様のお恵みに 感謝を捧げます

カヤ葺^{ぶき}のムラにも もうすぐ冬がくる
深い深い雪の中 楽しみに春を待つ

暖かい炉を囲み 耳をかたむける
昔々のおじいさんの話

里のふもとには 千曲の流れ
冠着に抱かれた さらしなの里

縄文時代についてなど何も知らず、「さらしなの里歴史資料館・館長」という立派な肩書きを頂いた私は、さすがに「何も分かりません」というのもマズイと思いい、やむなく館の書籍などを眺めていました。

そのうち、文献やら人々の話、遺物訪れる子供たち、公園のたたずまいなどに触れるうち、雑念や煩惱ばかりが詰まった頭の中の霧が時々晴れ、なぜか遠い縄文時代の情景がおぼろげに浮かんでくるようになりました。

縄文人たちは、原生林の中にそびえる冠着山や、朝霧にかすむ千曲川を毎日どんな気持ちで眺めていたのでしょうか。生活のほとんども

自然に支配されて生きる彼らは、空や大地、風雨や雪、四季のうつろいなど、日々大自然に祈り、幸せな暮らしを願ったことでしょう。

苦しみ多い移動生活から開放され、定住を得たムラでは、老若男女（そして犬も）が共に暮らし、炉の周りには暖かい団樂があつたに違いありません。

「祈り…縄文のムラに」。ちょっと気取ったタイトルがついたこの歌は、聞きかじりの乏しい知識の中から、ありつたこの言葉を並べただけの稚拙なものです。曲は古いアメリカの歌から借りました。

そして秋になり、縄文まつりのフィナーレで小学生たちの歌声を聴いたとき、にわか作りのこの歌が、少し本物に近づいたような気がしました。



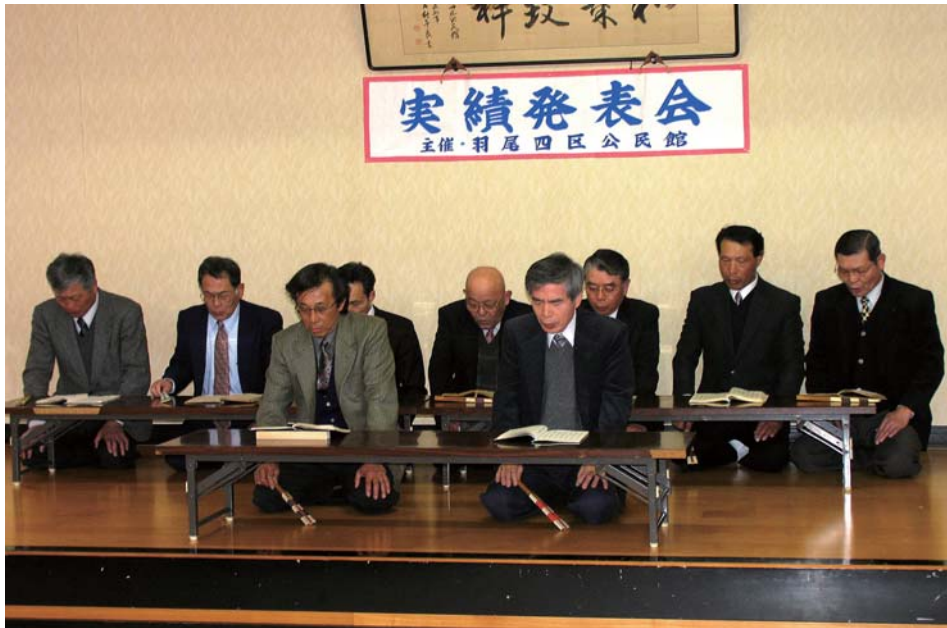
アフリカで生まれた日本人

さらしなの里歴史資料館で三月二十二日、「人類の未来に向けて・私たちはアフリカで生まれた」と題する講演会がありました。講師は国立科学博物館人類研究部長の馬場悠男さん。馬場さんは六百万年前に誕生した人類の進化の歴史についての専門家で、アフリカで生まれた人類が世界に広がった大きな理由が気候変動であることなどを分かりやすく解説してくださいました。日本人の祖先が最初に日本列島に来たのは四百万年前だそうです。

現在、地球上に繁栄している人類が「ホモ・サピエンス」と呼ばれるのですが、六百万年の間には人類にもいくつもの種類が生まれ絶滅してしまつたものがあるという指摘を聞き、絶滅危惧種は動植物だけではないのだと感じました。上の頭骨の写真は、右端がホモ・サピエンス、ほかは絶滅した人類です（復元品）。馬場さんをお持ちくださいました。

(天谷善邦)

宴たけなわではございますが…



当地で宴会などが催されるときには、必ずと言っていいほど主催者と招かれた側が盃と謡曲の交換をする「お肴」の慣わしが古くから行われている。招かれた側が主催者への感謝や労をねぎらう意味で「宴たけなわではございますが、この辺で本日の労を取られた

役員の皆様には、お盃を差し上げたいと思いますが、皆様いかがでしょうか」と動議を出して始まる儀式である。皆の賛同を得ると、「続いてお盃を受ける方、差し上げる方の指名権も、私に一任していただけますでしょうか」。これについても賛同が得られると、お盃を受ける側の

長を筆頭に何人かを指名し、その人数に合わせて酒を差し上げるものを選び、主催者、来賓ともに上座に座り、盃をそれぞれもってまず来賓が主催者側に注ぐ。

盃の交換の準備が整うと、長がお能の舞台で謡われる謡曲の中から、その宴会の趣旨にふさわしい一節を披露

する。終わると、主催者側もその返杯というところで長が「みなさま、またいまはありがとうございました。ただいまいただいた方々に

謡曲と盃の交換で労ねぎらう北信流



数名のお師匠様が存在し、多くの先輩諸氏が一定の期間を設けて練習をして来ており、諸所の宴会にはそのお肴役を勤めて伝統を引き継いできております。

お盃を差し上げ、来賓の皆様方全員に差し上げたものと「了解ください」と発言、盃を来賓の方々にお渡しし、酒をつぐ。

お肴がある場合は結婚式、地鎮祭、棟上祭、竣工式、仏事するときなどで、結婚式では「高砂や〜」がよく謡われています。これらの儀式に催されている

流れの起こりは、長野県でも特に北信地方の松代の地「真田十方石の城下町」が発祥とされ、通称「北信流」と呼ばれています。

当地にもこの文化が引き継がれており、本格的に謡曲を教えてください

じて謡を研鑽、練習に取り組む地区もあれば、冬期間、寒稽古と称して三カ月くらい行っている地区もあります。

多くの人たちがかわり、中には仕事も同時に取り入れて本格的な謡を練習、稽古しているところもあります。毎年、旧戸倉町地域としての発表会も行われ、羽尾地区では公民館の実績発表会にも参加を

し、緊張しながらも楽しく取り

組んでいます（上の写真）。地域文化の伝承を今後の世代にも引き継いでいただきたいです。

（竹森松雄）

【編集部注】上の写真は、大橋静雄さんが撮影したものです。右の写真は、謡曲のお師匠さんでいらした塚田康雄さんの功績を顕彰して建立された「強塚」です。

雨乞いの神でもある冠着権現宮



冠着トンネルのそばにある山の神池。江戸時代初期はこの池でも雨乞いをしたという

おらほの冠着

20

羽尾地区を流れる雄沢川・湯沢川は冠着山の湧き水であって日照りのときは、水枯れで田畑は大被害になった。こんなとき、江戸時代の村人は冠着権現宮に祈願して雨乞いをした。

鎌倉時代の終わりごろ、僧侶専慶は冠着社と諏訪社を明徳寺に権現様として奉祀した。明和七(一七七〇)年の大早魃のときに、羽尾の人々は明徳寺に修験者を集めて、二夜三日焚き火で

雨乞いの祈祷をしている。

さらに若者たちは代表を立て、満々として諏訪湖のご神水(種水)をいただきに遠く諏訪上社まで行き、樽詰めにして持ち帰り、溜池に注いだ。ところが、若者の一人が途中でヒョイと種水を盗み、自分の田に入れたら、豪雨で流されてしまったという。

冠着山の権現さまは、月読命で「万葉集」の「黍若水」の歌があつて「水をもっている」と言われ、江戸後期になると、雨乞いの神として信仰された。文久元(一八六一)年七月、この年は千曲川も素足で渡れるほどの早魃であつた。羽尾の人々は冠着山権現宮の前で、千駄焼による雨乞いの祈祷をした。

ところが、周辺村の入会地でもあつたので、勝手に木を切り焚き火をしたことで、もめ事になり若宮村名主の仲裁で、山頂一帯を植林することでも勘弁してもらつた。また、あるとき、飛び火で山火事になり、松代藩郡奉行よりお叱りを受け、そのつど、杉などを植林させられたようだ。

のち、事故が多いので、雨乞いは里宮の郷嶺山で行うようになった。苦しかった願いは松代藩公に通じて助成が得られ、既存溜池の補強拡張工事や、合津池(文政二年)、芝平下池(嘉永元年)などが新規に造られた。これらもみな村人の無償奉仕であつた。

このように早魃に苦しみ抜いた先祖たちの努力で、現在もこれらの溜池は満々と水を蓄えて田を潤している。

(大橋静雄)

〔編集後記〕昨秋の縄文まつりのファイナーレで「祈り：縄文のムラに」を全員で歌つた後、さらしなの里友の会会長の豊城巖さんが「みんな帰りたくない様子。これでいい」とおっしゃっていました。リズムは縄文太鼓で、メロディーは福島修さんがハーモニカで奏で、子どもたちが大声で楽しそうに歌っていました。どこからとなく自然に「アンコール！」の声が上がつたのも、これまでになかつたことです。

まつりの芸能大会では、更級小四年生たちが、森を描いた大きな屏風を舞台背景としてチームごとに共用し、見事な縄文寸劇を披露してくれました。これまで役者の声が観客に届かないのが課題だったので、マイクを声が拾える距離のところ、舞台手前に数本置くという工夫も凝らし、劇の物語もよく分かりました。

「祈り」の歌は、四月にあつた芝原地区の学習実績発表会でも、JA女性部のみなさんが「縄文のうた」と題して地区の方々に披露しました。初めて聞いた人も「分かりやすく親しみが持てる」と喜んでいました。

さらしなの里友の会だよりは発行から十年、第二十号をお届けすることができました。楽しい紙面づくりに、これからもお力添えをよろしく願っています。

編集・発行

さらしなの里友の会たより編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八一

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六(二七六) 七五二一

Fax 〇二六(二六二) 四二六一